



1996 年(平成 8 年)
6 月号 (No. 613)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

平均年齢二十六歳の K2 登山隊元氣に出発

青年部

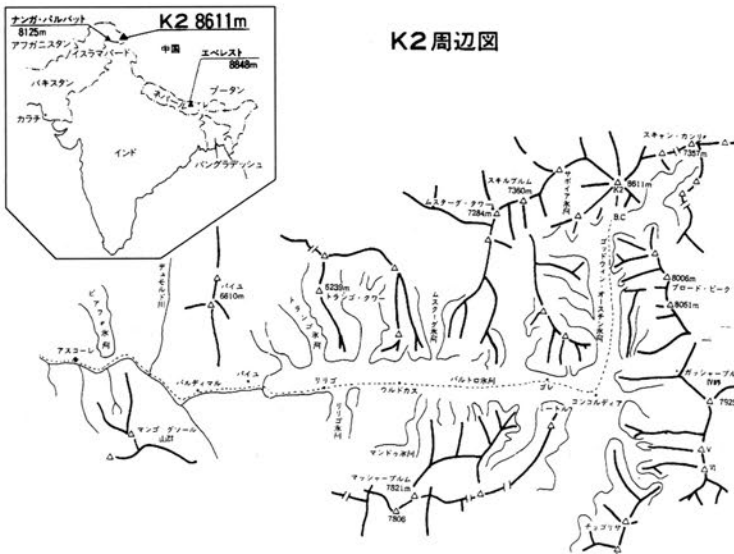
世界第二位の高峰 K2 を目指す登山隊は、ネパール先発隊(五月二十一日)、パキスタン先発隊(五月二十四日)、本隊(五月三十一日)に分かれて、成田空港から元氣に出発した。登山隊はその後、六月八日にアスコレからキャラバンを開始、六月十九日より登山活動に入り、登頂予定日を八月四日から六日の間に設定している。

今般の登山隊は登攀メンバーの平均年齢が二十六・七歳と、若い隊員だけで組織されているのが特徴である。日本山岳会では近年、若いクライマーの養成が叫ばれているが、ナムチャバルワ、マカルー東稜などの遠征をとおして、若手が育ってきたことは疑う余地がない。事実、今回の K2 登山隊は、ナムチャバルワ、マカルー東稜に参加した隊員五名が中心の役割を果たしている。

K2 南南東リブルート図



K2 周辺図



目次

K2 登山隊 元氣に出発	1
K2 登山隊 1996 盛大に壮行会	2
東西南北	
世界遺産と富士山	3
小さな頂	4
海外の山	5
山と医療・子どもの登山	6
山の切手・9	7
報告	
三水会現地集会	8
1992 同期会	8
ジャック 93 会	8
山げらの会	9
支部だより	10
福岡支部 岐阜支部	
同好会担当者名簿	11
図書紹介	12
『初登頂』『知命からのヨーロッパアルプス』『定年後は山歩きを愉しみなさい』『還暦のエベレスト』『魅せられてネパール』『サイハンモンゴル 自然・人・生活』他	
書籍受入報告・住所変更	14
新入会員	15
会務報告	16
INFORMATION	18
ルーム日誌	19

▶ 日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時

▶ 図書室開室時間

日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

日本山岳会としては、初めて挑むK2というビッグな山に、若手だけの登山隊を送り出すなど、今までの遠征隊では考えられなかったことである。また今回のK2では高所ポーターに頼らないところにも、登山隊の特徴がある。

昨年十一月に来日したパキスタンのK2登頂者「ナジール・サビール氏も「K2にこのような若い隊員だけで挑戦する隊は見たことがない。驚くと同時に素晴らしいことだ」と絶賛していた。

今、日本山岳会に求められているのは、このたびのK2登山隊のように、若手自らが企画・立案・実施し、経験していくことである。それが「若手の育成」につながるものであり、これを実践したK2登山隊の計画に、その意義をみることができる。

日本国内外を問わず注目されているこの計画を推進した山本篤隊長、松原尚之副隊長を初め全隊員には、誇りを持って思う存分K2で活躍してくれることを願う。そして、この貴重な体験はさらに将来の糧として、日本山岳会の飛躍に生かさなければならぬ。

しかし出発するまでには、どれだけ多くの方々のご支援・ご協力を受けたであろうか。これらの方々の協力なくして、登山隊を送り出すこと

は不可能であった。この場をお借りして深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。隊員はこれを肝に銘じて基本を忘れず、安全登

K2登山隊一九九六 盛大に壮行会を開催

日本山岳会青年部K2登山隊の壮行会が五月十四日、東京神田・明治大学創立百周年記念大学会館において、会員、隊員の出身大学山岳部関係者ら百八十名の参加をみて盛大に



K2登山隊1996の隊員たち

山に徹し、頂上を目指してほしい。一九九六年夏、若い隊員の真剣な行動を見守っていただきたい。

(宇田川芳伸)

開催された。

支援する会の村井龍一会員の司会進行のもと、開会に当たり日本山岳会村木潤次郎会長が挨拶に立ち「日本山岳会も今や世の中の縮図のよう

に高齢者山岳会になりつつある時に、若い人たちによる登山隊が編成されるのは有意義である。かつての探検的パイオニアワークの時代と比べれば面白さは欠けるかもしれないが、世界第二位の高峰に挑むことは自分たちの力を計る絶好の機会である。

しかし危険は変わらない。

力を合わせて貴重な経験を積んで帰り、後輩に教訓を残してもらいたい。全員無事に帰ってきてほしい」と期待と激励の言葉を寄せた。また、読売新聞社島田公博運動部長の音頭により、参会者一同登山隊の成功を祈念して乾杯した。

しばし歓談ののち隊員の紹介があり、山本篤隊長は「今回の計画はマカルーから帰国した昨年六月から進めて一年にもならないが、十大学からの十八人による登山隊となった。

平均年齢二十六歳という若い隊であることから、諸先輩から重みのある言葉をいただいた。それらを真摯に受け止めて無事故で登って帰ってきたい」と決意を述べ、各隊員からそれぞれ若者らしい自己紹介があった。

何人かの隊員像を紹介すると――

「素晴らしい機会なので福岡から参加した」「八八年の三国友好登山隊の時は大学一年生で、胸を躍らせながらテレビ中継を見ていた」「輸送担当なので、ポーターのダンスに飛び込んで仕事をスムーズに進めた」「現在大学四年」「この春卒業したばかり」……。この日欠席の竹内隊員については、立正大学隊でチョモランマに登山中であり、チョモランマからK2に直行することになっている、との紹介があった。

閉会に当たり、宇田川芳伸青年部担当理事が「今回の登山は若い隊員が自ら企画・立案し、交渉を進めたもので、ここに登山の意義がある。

彼らの果敢な行動を見守ってやっていただきたい。皆さんのご協力に感謝申し上げます」と謝辞を述べた。

(南川金一)

東西南北

世界遺産と富士山

西郷正郎

本会自然保護委員会の会報「木の目草の芽」十六号に千坂正郎の筆名で掲載した標記についての事情は、現在は当時よりさらに進展をみている。しかし、いまだ問題の焦点をはっきりつかめていない人々が多々いるようである。そこで再度問題点をここに指摘しておきたいと思う。

■世界遺産とはなに

一九四五年十月に発足した国際連合の理念は、国際平和と安全維持である。国際連合はその理念に基づき、国際紛争の解消、人権維持、医療の普及、貧困児童の救済・教育など、幾多の部門で憲章を定め、実施機関を作り活動している。

その中の一つにユネスコがある。

日本語でいうと「国連教育科学文化機関憲章」である。同機関は「世界の遺産の保存及び保護を確保し、かつ関係諸国民に対して必要な国際条約を勧告することにより、知識を維

持し増進し普及することを規定し、文化財及び自然の財に関する現存国際条約、国際的な決議が、この無類の、及びかけがえのない物件を保護することが、世界のすべての国民のため重要であること」を決議している。したがって、「人類全体のために世界遺産の一部として保存する必要があるものがあることを考慮して、集団的な援助を供与することによって、顕著な普遍的価値を有する文化遺産及び自然遺産を集団で保護するために効果的な体制を作り、あらゆる組織を常設的に条約の形式で採択すること」が重要であるとした。

国連は第十六回会期の総会において、この問題は国際条約の対象となるべきことを決定した。こうしてこの条約は一九七二年十一月に採択された。以上が世界遺産条約が締結されることになった経過及びその趣旨の大体である。

日本政府は、条約に加盟したが国内の批准が遅れたため、直ちに実施するわけにはいかなかった。しかし約二十年を経た今日は批准もすみ、

支障なく実施されている。

■富士山の世界遺産登録申請

日本人の大部分は富士山を日本の象徴、記念物と考えている。とくに富士山を囲む静岡、山梨、神奈川の三県民は郷土の宝という意識が強い。それを広く他国に知らせることができないか、との思いが常日頃心にあった。そこへ世界遺産に登録することができる国際条約があることが判ってくる、すぐにそれに登録することに気づいた。そういうことには素早く対応する地元静岡の新聞社、ラジオ、テレビ局、それに県当局、企業体なども加わって、富士山を世界遺産に登録の請願申請の署名運動が展開されることになった。当初の平成六年の予想では百万人集まれば上出来と考えられたらしいが、それを軽く突破し百三十万人となり、現在は追加を含めて二百万人を超えたといわれる（静岡県総人口約三百六十万人）。

この結果をみては、県当局もマスコミも動かないわけにはいかない。それまでは富士山に関係したイベントは年四、五回であったのが、現在は週一回くらいの割で、講演会、シンポジウム、動植物地質の研究会、展示会、山岳会などの集会和枚挙にいとまがないほど富士山に関する催しが増えてきた。しかし、私たちか

らみると、県民の世界遺産についての知識不足、自然環境、遺跡などに対する国際的認識の不足など、まだまだ勉強しなければならない点が多くあることが判ってきた。

そこで、それを補う意味で新聞社主催で、国連のユネスコほか国際自然保護団体の専門家を招いて意見を聞く「富士山国際フォーラム」を催すことになった。会は一九九五年九月十四日から三日間にわたり富士市のフジ・ロゼシアターで開催された。

海外から招待に応じた人々は、ベルンド・フォン・ドロステ（ユネスコ世界遺産センター所長）、カルメル・アニヨン（国際記念物遺跡会議世界遺産審査責任者・文化的景観検討責任者）、ペンク・ルカス（国際自然保護連合世界遺産・文化的景観検討責任者）、ジム・トールセル（国際自然保護連合世界遺産担当責任者）、ジョアン・ドミッセル（国際記念物遺跡会議副会長）の諸氏五名。日本側出席者は国立公園協会日下部理事長、日本イコモス国内委員会木原理事、官庁側として環境庁長官、静岡県知事、パネラーとして池田満寿夫の諸氏が参加された。

■会議の内容

会議は最初の二日間は未公開の専門委員会、最後の日は委員長の総括報告と海外より招待した委員の講演

に当てられた。それらを総合して、聴講者である私に得られた会議の感触は次の三点である。

(一) 世界遺産条約の対象になるのは「文化遺産」(遺跡も含み、歴史上人類にマイナスとなったものも含む)と「自然遺産」(有形で物質的なもの、哲学、宗教、思想のような観念的なもの)だけでは世界遺産としては登録できない。

したがって、富士山がいかに日本人の精神文化に影響を与えているといっても、それだけでは世界遺産として承認する十分な理由にはならない。日本側はそれが判ってきたので文化遺産、自然遺産のほかに「景観遺産」というジャンルを新たに作り、そこに富士山を登録しようと考えているらしいが、景観を物質として普遍的な遺産価値を認めるかどうかは、まだ国連としてもはっきり結論を表明していないので何ともいえない。

(二) もし富士山が景観を理由に世界遺産として登録が承認されたとすれば、早速に実行しなければならぬことがある。

世界遺産の保護、保全、修復など管理システムの作成、その実施機関の設立。そこに明示されなければならない事項を例示すれば、研究、見学、観光等のための訪問者に対する環境の整備(宿泊所、トイレ、ごみ

処理場、案内所、センター)、交通輸送機関の整備、来訪者の人数抑制方法の立案、その他である。

(三) もう一つ、議題の表面には浮かび上がってこないが、ユネスコとして重要なことがある。招待された外国の委員たちの講演の中の言葉の端からうかがえたことであるが、自衛隊の学校と射撃演習場、米軍キャンプが富士山麓の領域内にあることである。

仮に富士山が景観を評価され、世界遺産と認定された場合、「景観」の性質上、富士山の総体が評価されるのであって、頂上だけ、あるいは山腹の一部というわけにはいかないだろう。

ということは自衛隊、米軍は戦争で人類が殺しあう武器と方法を研究演習する場所に富士山を選んでいることになる。演習による砲弾で世界遺産を破壊していることになり、国連の基本になる理念とは真っ向から対立するものとなるであろう。自衛権の発動として先進国の一部には理解する国があるかもしれないが、国連加盟国は百三十か国ある。その大部分を納得させるだけの力を日本政府は持っているかどうか疑問である(ことに最近、沖縄の米軍基地の射撃演習場を東富士山麓に移転する案が日本政府内で検討されている現状

では、富士山の世界遺産登録推進からはますます遠のくことになる)。

以上が過日開催された「富士山国際フォーラム」に参加して感じたことであるが、そこで明かになっている日本人の考え方の矛盾は解決できることであろうか?

小さな頂

野田四郎

昨年五月中旬のある日のことだった。朝、目が覚めると久し振りの快晴である。勤めを辞めた気ままな生活、朝食のあと早速スケッチブック、カメラ、弁当と水筒をザックに入れて家を出た。前年の晩秋、やはり今日と同じような快晴の一日、定山溪の夕日岳にでかけたときのことを思い出し、夕日岳に行こうと考えた。あのときは爛熟した秋の紅葉と黒々とした針葉樹が織りなす樹林の上に、新雪を冠ったムイネ山と余市岳が、白い雲を浮かべた青く澄んだ秋空に輝き、まだ黒い天狗岳がその側に聳えていた。このムイネ山と余市岳の残雪に光る山々と、春の樹林を見たくて出かけたのである。

定山溪神社の裏から沢筋の道をたどると、少し盛りを過ぎていたが早速ニンソウの群落が目に入る。カ

タクリはすでに花が終わり、三角の実をつけていた。これだけ沢山のカタクリなら、五月初めの花の時期にはさぞ見事だろう。道はやがて沢をはなれ、まだほとんど芽吹かない落葉広葉樹林を巻いて行く。そのうちカタクリ、エゾエンゴサクが咲き残った斜面に出た。ところどころにシラネアオイも咲き出している。早速カメラとスケッチブックを取り出した。展望台に着くと樹林の間から真っ白なムイネ山が見える。再びスケッチブックを開く。前山にはもう雪がなく、日当たりのいい斜面では鮮やかな緑や黄緑の芽を出しているが、未だ早春のたたずまいである。ここからは、余市岳は残念ながら樹に邪魔されてはつきりとは見えない。展望台を過ぎると林相は変わり、トドマツやエゾマツも交じってくる。また路傍の野草も変わり、ヒメイチガヤやヒトリシズカなどを見るようになった。花を撮りながらゆっくりと登る。頂上近くに一箇所、林が切れて余市岳がよく見える場所がある。またスケッチブックをとり出して余市岳と天狗岳を画く。

頂上からの眺めは、思ったとおり期待を裏切らなかつた。快晴の春の光を浴びながら、そよ風に吹かれ、中岳・ムイネ山・余市岳・天狗岳、その奥に一部だけ白く光る朝里岳の

見事な山並を眺め、春のザラメ雪の時、あのあたりを何度も歩きまわった頃を思い出しながら楽しんだ。天狗岳にも雪渓が残り、ひとときわ立派に見える。後ろを振り返ると烏帽子岳・神威岳も樹間に見えた。

ひとあたりスケッチを終え、食事をすました後、近くの樹を双眼鏡で覗いてみると、イタヤカエデは花のまっ盛りである。もう若葉も芽吹いてはいるが出たばかりで、エゾイタヤかベニイタヤかは区別できなかった。またトドマツも赤い雄花を着けている。もうすぐ黄色の花粉をさかんに出すのだろう。少し不思議に思ったのは、同じダケカンバでも、すでに若葉を出している木と、まだ葉を出さず、雄花だけを枝先にぶら下げているのがある。個体によって、あるいは樹齢によって花が咲き、葉を出す時期が違うのだろうか。同じ個体では、自家受粉を避けるため雄花と雌花の成熟する時期がずれるということ聞いたことはあるが、国道から頂上まで高度差わずか三〇〇メートル、すばらしい山の眺めと、四季折々の植物のたたずまいを見せてくれる夕日岳は、訪れる人も少なく静かで、なかなかすてがたい僕の好きな山の一つである。満ち足りた気持ちで山を下る。定山渓はむせかえるような若葉であった。

海外の山

エベレスト 悪夢の一日

江本嘉伸

五月十日、エベレストからの一報は、心あたたまるものだった。

「〇L登山 やったね最高峰」

「自然体の山行夢つかむ」「ほっとした”夫”」

日本人女性二人目の世界最高峰登頂者となった難波康子さんの成功を、新聞は一面、社会面をさいて大きく伝え、テレビも二十一年ぶりの壮挙として華々しく報道した。

十一日夜になって、事態は急変した。

「難波さん行方不明」

「快挙の報、一日で暗転」

同じ日、北のチベット側から山頂を目指していた福岡チヨモランマ峰登山隊の第一次アタック隊の二人が登頂したことが伝えられた。「インド隊の三人頂上近くで死亡」とのニュースが同時に流れた。

ネパール側では、遭難は難波さん一人ではないことがわかってきた。

天候が激変したのだ。烈風に寒さと疲労が加わり、どの登山家も一瞬にして危険にさらされた。

難波さんらとともに登った三十一歳のニュージーランド青年、アンドリュー・ハリスはキャンプ近くで体力尽きた。そして、隊長のロブ・ホール自身が、不調のアメリカ人、ダグ・ハンセンに付き添ったまま、八七〇メートルの高所から下りられず、ともに帰らぬ人となった。

驚くべきことに、ホールだけでなく、同じく「公募隊」であるアメリカの「マウンテン・マッドネス」隊のリーダー、四十歳のベテラン登山家、スコット・フィッシャーも登頂後、動けなくなった。フィッシャーはエベレストは二度目の登頂で、K2を無酸素で登った実績を持つクライマーである。

結局、ロブ・ホールの隊の隊長以下難波を含む四人と、フィッシャー隊の隊長自身、計五人がこの日ネパール側で生還できなかった。北側のインド隊の三人を含めると八人が一日で亡くなったことになる。これはエベレスト登山史で一日に起きた遭難としては最も深刻なものである。

フィッシャー隊には三人の女性隊員がおり、いずれも登頂に成功した。アメリカのサンディー・ヒル・ピットマン（四一）とシャロット・フォックス（三八）、デンマークのレネ・ガメルガルドである。

九四年にエスクワイア誌で「私たちの愛する女性」に選ばれ、「社交界の華」とうたわれるほどの人気者であるピットマンは、九三年には同じ南東稜から九四年には東のカンシユン氷河からエベレストに挑んだ登山家。この登頂で難波と同じく待望の七大陸最高峰を手中にした。

ピットマンはサウスコルに向けて下降中、ホワイトアウトに巻かれた。じきに同じ隊のフォックス、ティム・マディソンの二人に合流し、「生き続けるために歌をうたって励まし合った」。フィッシャー隊のサブリーダー格のニール・バイドルマンが三人を見つけ、酸素を与えて安全な場所まで誘導した。

難波もこの時フィッシャー隊の病理学者、シーボン・ベック・ウェザースとともに、近くにいたらしいやがてウェザースは奇跡的に意識を取り戻して歩きだし、助かったが、難波に救いの手は届かなかった。

北側では、予想もしないことが起きつつあった。インド隊の三人に福岡隊が遭遇していることから「なぜ救助しなかったか」との非難が出たのだ。無論、反論が開始された。

南側十二隊、北側十四隊。混み合ったエベレストの、明日を象徴する悪夢の日だった。

山と医療

YIAA 医療委員会公認基準(その6)

子どもの登山
(1995)

佐藤典子・中島道郎

■はじめに

子どもでも、両親や引率者の登山経験、山の危険に関する知識の程度によって、年齢に見合った登山をすることは結構なことである。大自然の中をハイキングしたり、山に登ったり、スキーで滑ったりすることは、子どもにとっても楽しい体験のはずである。

その際、両親や引率者が考えるべき大事なことは、その子の年齢や健康状態に合わせて、その日の活動時間を加減してやり、休憩時間は十分にとつてやる、ということである。

■高所特有の危険性

急に高所に登る場合、高所が持つ危険に対して気をつけるべき事柄は、

大人も子どもも変わりはないが、子どもというものは、高所障害による症状を的確に表現できないものだ、と考えておくほうがよい。だから両親・引率者は、子どもたちに頭痛・嘔気・嘔吐・息切れなどの症状が出ていないか、常に気を配っていないければならない。そして、もしそのような症状が見られたならば、それは子どもの普通の病気ではなく、高所障害ではなからうかと疑って、すぐに医療機関に連れていくべきである。もし医療機関のないところであれば、万難を排して、ただちに下山すべきである。

また、未熟で生まれた子、栄養状態の悪い子、貧血のある子、兄姉にSIDS(注)の家族歴を持つ子などは危険が大きいので、そのような子どもを連れて高所に登らないほうがよい。

現在のところ、三〇〇メートル以下の中等度高所においては、子どもだからといってとくに危険ということはなく、大人の場合と同じと考えてよい、とされている。三〇〇メートル以上となると子どもに関するデータはなく、したがって用心するしかない。それでも敢えて連れていくとしたら、次を問うてみるのが大事だ。

*子どものほうが、本当に登りたが

っているか?

*親のほうが、世間の見栄で連れていこうとしているのか?

(注) 乳児突然死症候群Ⅱ生後一年以内の乳児の突然死。低酸素状態で、より危険が高くなる。

■急性高山病(AMS)

AMSの診断はレイクルーズ規約の定義によって下される。すなわち、高所に到達してから数時間後という状況下において、頭痛があり、その上に次の四項目のうち少なくとも一項目が伴っていれば、それはAMSである。消化器症状(食欲不振、嘔気、嘔吐)、疲労感、めまい、睡眠障害。

二五〇メートル以上の高所では、AMSの予防は大人の場合と同じである。すなわち

*ゆっくり登る(前夜の宿泊地点から垂直距離にして三〇〇メートル)

*高所に到達したらあまり動きまわらない。

*AMSの症状が出現した時は下山する。

AMSを予防する薬物、例えばアセタゾラミド(ダイアモックス)、デキサメサゾンについては、子ども

では研究されておらず、したがって薬物の使用についてはすすめられない。高所順応のルールを守ることが何よりも大切である。

■耳、鼻、喉の病気

高度や気圧の急激な変化につれて、耳痛や中耳炎の危険度が高くなる。

乳児を連れて車で高所に上り下りする際は、高度差三〇〇〜五〇〇メートルごとにミルクを与えることをすすめる。風邪をひいている時は旅行をとりやめたほうがよい。それができない場合は、生理的食塩水を用いて鼻をできるだけきれいにし、鼻の通りをよくしておくことが大事である。乳児の場合はより度々車を止めて休憩をとり、ミルクを与えるほうがよい。ロープウェイは圧変化が速いので、病気の子どもを連れて乗ってはならない。

また、スキーリゾートでは、部屋の暖房がきき過ぎて空気が乾燥し、喉を痛めやすい。これは加湿器を用いれば防ぐことができる。

■寒冷

子どもは凍傷や低体温になりやすい。それは、子どもの体は皮下脂肪が薄くてエネルギーの貯蓄量が少な

今年もさげんで会いましょう

い上、体重あたりの対表面積比が大きいために熱を奪われやすいからである。引率者が気温に合わせて、子どもの衣服と帽子を選び、調節してやるのが大事である。とくに頭からは大量の熱が奪われるので、寒さから身を守るためには帽子をかぶることが大切である。

また寒い時には、背負い子で乳児をおんぶすることは大変危険である。子どもの体は急速に冷やされてしまうし、大腿動脈の圧迫によって下肢の血液のめぐりが悪くなるため、凍傷を負う危険性が高い。

■紫外線

大人以上に紫外線から皮膚を保護することが大事である。行動中も休憩時も日陰を利用すること。肌は適当な衣服でおおい、露出する部分には強力な日焼け止めクリームを塗ること。目を守るためには良質のサングラスを使用し、日除け帽を被ることをすすめる。

■栄養

子どもは大人に比べ脱水の危険度が高いので、脱水を予防するために水分はたくさん飲ませること。脱水があると冬では凍傷に、夏では熱射病にかかりやすくなるし、腱や軟骨を痛める原因ともなる。スタミナを保つために、食事は規則正しくとること。食事を抜いてはいけない。

山の切手⑨ 一相山之良 登山者・II

1985年12月25日
ルーマニア発行。
ヒラリーを描くも
のは、ニュージー
ランド、北朝鮮か
らも発行されてい
る。



わずか九年の間にこの大記録を達成した。しかも九座が前人未踏の新ルートからで、当時至難とされた冬期の登頂が四座含まれている。まさに超人的な活躍であった。ポーランドは、この偉業を称え記念切手を発行した。なお、この二人に続くといわれたスイスのマルセル・リュエディは、十一座目のマカルーから下山中、肺水腫で死亡、日本の山田昇も九座の登頂を果たしたものの、八九年マツキンリーで遭難した。

ヒマラヤの高峰は、一九六〇年代までにそのほとんどが初登頂され、ナシヨナリズムを背景とした熾烈なレースが幕を閉じた。アルプスでの黄金時代が、やがて銀と鉄の時代を迎えた過程に似て、ヒマラヤの七〇年代以降も、新しい潮流が生まれた。より困難なルートの登攀や、ヒマラヤン・ジャイアントのすべてを個人で登るといった試みである。

八千メートル峰十四座を完登したのは、南チロル生まれのラインホルト・メスナーが最初だった。七〇年のナンガ・パルバットから八六年のローツェまで、十七年かかって成し遂げた。二人目がポーランドのイエジ・ククチャである。七九年のロー

ツェから八七年のシシャパンマまで、北朝鮮)がある。

ヒマラヤで最も難しいとみられたローツェ南壁は、九〇年にユーゴのトモ・チェセンが登った。メスナーが「今世紀中に登ることは絶望的で二十一世紀の課題として残る」とまで言った壮絶な水壁である。チェセンが公表した頂上での写真の説明が不十分で、登頂の真偽をめぐって大論争が起きたが、ソロ・アルパインスタイルによる四十五時間の驚くべきスピード登頂だった。ユーゴスラビアは登頂一周年に記念切手を発行した。

ほかに登山家個人を描く切手は、シュローザー(旧東ドイツ)、パンドー(中国)、スングレ(ネパール)、パサン・ラム(ネパール)、ヒラリー(ニュージーランド、ルーマニア、北朝鮮)がある。



1991年4月24日ユーゴスラビア発行。
ローツェ南壁の登攀ルートとトモ・チェセン。



1975年中国発行。エベレストの北東稜を女性として最初に登ったチベットのバンドー。



1988年8月17日ポーランド発行。ククチャの肖像と国際オリンピック委員会が彼に授与した銀メダル。

REPORT

報
告

REPORT

三水会現地集會

甲州二十六夜山

三水会は四月十三日、甲州・二十六夜山で現地集會を催した。道志の魅力に引かれ、この山域には御正体、石割などへと山行を重ねている。

午前九時半、富士急行・都留市駅に集合。タクシーに分乗し登山口の道坂峠へ。今倉山(一四七〇メートル)までは直登だ。高度をかせぐと御正体山の背後から富士がぬっと顔を出してくる。その「逆さ扇」が大きくなり、裾野を一望できるようになると頂上である。約一時間半の行程。

今倉山は、二つの峰からなる。二十六夜山へは、西峰から五つほどコブを越し高度を落としていく。このあたり、国土地理院の地形図には山名も登山道もない。が、道はしっかりしている。コブのひとつ、松峰からの眺望が素晴らしい。

午後二時半、二十六夜山(二二九七メートル)に到着。リーダーの佐藤芝明さんが山名の由来を披露、月

待ちに由来しているのだという。陰暦二十六日、とくに正月と七月に、この山頂で月を眺めれば、願いごとがかなう、という信仰があったそうだ。山名の由来を詮索するのも楽しみのひとつである。頂上には「二十六」の石碑があり、嘉永年間の建立とあった。

下りは、落ち葉を敷きつめた急坂。沢筋にミソサザの鳴き声が聞こえた。林道まで約一時間。あとは、富士急行・赤坂駅まで五キロの道のり。いささかうんざりする舗装道路だった。参加者二十名。(高橋重之)

一九九二年同期会

武川岳・第二回懇親山行

四月十四日、九二年同期会の第二回懇親山行は快晴に恵まれ、奥武蔵の武川岳で行われた。参加者十四名、幹事は田上和儀、村山裕嗣、高橋てる子、井上希夫・千夏夫妻の五氏。

西武池袋線飯能駅前からバスで、ヤマザクラ、ミツバツツジなどの咲き競う名栗川(の谷を溯り、最奥の名

郷集落で下車した。この花はまだ蕾であったが、谷川のほとりでは明るい陽光を浴びて、キセキレイが飛び回っていた。

集落から天狗岩コースをとって急な舗装の林道を登る。十五分ほどで林道を離れ、杉と檜の植林地の急登をワンピッチ、ヒガラのさえずりを聞きながらひと汗かいて、天狗岩直下の露岩地に登り着いた。ここではお目当てのカタクリの花に対面することができた。冬枯れ姿の林床に咲くこの花は、新鮮な春の喜びを与えてくれる。

前武川の手前にあった雑木林はすっかり伐採されてしまい、見るも無残な裸地に変わり果てていた。しかしそのおかげで武甲山、大持山、妻坂峠、蔵山方面への展望はよくなっている、思わず足を止めてしまった。

武川岳山頂で昼食のあと、同期会の運営についての話し合いが行われ、次回の懇親山行は秋、上高地の山研に一泊して行くことに決定した。

下山コースは、先程の伐採跡地から見た妻坂峠で左折、南面の谷を下る。この谷では春、何羽ものミソサザのさえずりを聞くことができるのだが、今回はほんのひと声、それらしい金属的な鳴き声を聞いただけであった。この春の低温の影響であらうか、それとも個体数が減ってし

まったためであろうか。

いつもは長い林道の下りも、仲間と楽しく語らいながら歩けば短い。たちまち大場戸橋を過ぎ、名郷のバス停に着いてしまった。(近藤 昭)

ジャック93会

箱根・お花見登山集會

本会恒例の桜を楽しむ春山登山を今年は四月十四日、箱根の明神・明星ヶ岳で行った。大雄山駅前に、参加者十五名全員が九時に勢ぞろい。

快晴で気温も暖かく、皆の表情も弾んでいた。駅前からバスで約八分、登山口の道了尊に着き、身支度を整えて九時半過ぎに出発した。

気温一五度、杉林のとぎれる辺り、標高七〇〇メートルの見晴小屋を過ぎると、展望が大きく開け、背後に丹沢の山々、左手に相模湾。目を凝らして見ると、春霞の中にぼんやり江の島が浮かんでいる。のどかな景色を楽しみながら正午過ぎ、明神ヶ岳の頂上に着いた。金時山を前にした雄大な富士の姿に一同歓声を上げ、まずは全員で記念撮影。気温一〇度、北西の強風を避けるため日だまりの斜面に場所を移し、楽しい昼食。食べながら話も弾んだ。

午後一時過ぎ、明神の頂上を後にし、左右に雄大な展望の広がるなど



戸隠でクロカンスキーを楽しむ山げらの会員

戸隠クロカンスキー

山げらの会

らかな尾根道を明星ヶ岳へ。展望は
きかなかったが、また全員で記念写
真に収まった。小休止ののち、最終
目的地・宮城野温泉会館を目指して
下山にかかる。十二日に箱根地方に
降った時ならぬ雪を心配して、前日
下見をした川口会員の忠告を守り、
雪解けのぬかるみを全員無事に宮城
野に下り立つ。湯につかり、ビール
の宴で疲れをいやし、桜の花を惜し
みつつ、箱根を後にしたのは夕方六
時半を過ぎていた。(和波久基)

一九九三年六月に、クロスカント
リースキーを主な活動とするグルー
プ「山げらの会」が発足、一九九四
年には日本山岳会の同好会となりま
した。その活動状況は、九十周年の
式典会場のパネル展示でもご覧いた
だいたとおります。

山げらの会のクロカンのフィール
ドは戸隠。これは会発足のきっかけ
となったのが戸隠にあるロッジ・タ
ンネのご主人・里野龍平さんによる
「クロカンのすすめ」であつたから
です。以来、毎年三月に戸隠を訪れ、
里野さんの指導のもとクロカンの技
術をみがき、また戸隠をめぐるツア
ーを楽しんでいます。戸隠行きも今
年で三回目となりましたが、三月八
日・十日のクロスカントリースキー
行は前回、前々回を上回る充実した
内容となりました。

三月八日、里野さんをリーダーに
鏡池ツアーに出発。雪解けの流れを
越え、春の訪れを告げるという戸隠
山の雪崩の音を聞きながら、大陸の
黄砂の混じった「赤い雪」の上をス
キーで進みます。木々を愛で、動物
たちのマークを追ううちに鏡池に到
着。昼食ののち天命稲荷、戸隠奥社
随神門を経てこの日のツアーは終
しました。去年、一昨年に比べ、ク
ロカン技術は全員格段の上達です。
我らが師匠里野さんもお認めくださ

つたのか、来冬の戸隠以外でのツア
ーが提案されました。メンバーもや
る気満々で、この晩すぐに今後のク
ロカンツアーの様々な計画が立てら
れました。

翌九日は、ロッジ・タンネ宿泊の
他のパーティーも合同で、またも里
野リーダーの下、古池・種池ツア
ーに出発。発足時にはメンバーのほ
んどがクロカン初心者だった山げら
の会にとっては、二日連続のツア
ーは三年目にして初めて、しかもこ
日のコースは今までにない長丁場?
ですが、昨日師匠のお眼鏡にかなっ
ただけあって、足並みもバッチリで
す。

去年までは苦労した川の渡渉も、
今回はメンバーの一人が男性に混じ
ってステップを作ります。広々とし
た古池では、戸隠山をバックにクロ
カンのデモンストレーターよろしく
写真撮影。種池も渡り、この日も全
員満足してツアーを終りました。
技術の進歩、クロカン計画の林立
と相俟って、帰京してからスキーセ
ットを購入するメンバーが相次ぎま
した。山げらの会はクロカン三年目
三回目にして一つ上の段階に進んだ
といえましょう。遅々とした歩みと
いってしまえばそれまでですが、決
して無理はせず、本当に好きなこと
を心から楽しみ、しかも「うまくな

りたい、なるぞー」という密かな望
みと決意をそれぞれが抱いていたこ
とが、今回の小さな上達につながっ
たように思います。

クロカン以外のことごとにおいて
も、会発足三年間で基礎固めができ
たと思います。メンバーの自主企画
による山行・行事に、この冬は初め
て山スキーも登場し、有志が尾瀬あ
やめ平のツアーを楽しみました。

山げらの会にとって、今年度はい
つにも増して楽しみな年です。自分
のスキーで行くフィールドが増える
でしょうし、クロカンの他にもさら
に活動が広がり、深まることと思
います。(吉田雅子)

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

福岡支部

マナスル初登頂 四十周年記念講演会

福岡支部は四月十三日、十四時から北九州市戸畑区一校の西日本工業倶楽部で、平成八年度の通常総会、及び恒例の記念講演会を行った。演題は「マナスル登頂四十周年」、講師は初登頂者の日下田実会員である。会場にはマナスル遠征の一次から三次まで参加した村木潤次郎現会長、小倉茂暉常任評議員、竹田寛次会員が遠路東京から参加。熊本支部の本田誠也支部長、西沢健一前支部長、馬場猛会員夫妻、当支部顧問の小林義明、柴田重太郎、脇坂順一各会員をはじめ約百名が聴講し、会場は熱

気で充満した。

講演は初めに、村木会長が一次(五三年)、二次(五四年)の遠征が成功しなかったいきさつを話された。とくに二次隊は登山基地であるサマで、現地住民の宗教的見解の相違から「登山は神聖なマナスルの山を穢す行為である。雪崩で寺院がつぶれ、僧侶が死亡したり、疫病が発生するのはその結果である」という理由で妨害を受け、転進せざるを得ず、ガネッシュ・ヒマールに変更したことなど、興味深いものがあった。

日下田会員は、初登の今西壽雄隊長(十五代会長)、シエルパのギヤルツェン・ノルブ氏(故人)の二日後、加藤喜一郎隊長(故人)とともに登頂した。当初の初登頂を成しとげた四人のうち三人までが他界されている。「マナスル登頂は、三次にわたる登山に対する情熱や執念が成功に導いてくれたものである。個人の力では成し得ないもので、登山隊全員の協力と、山岳会全体の力で成し得たものである」と非常に謙虚な言葉で話を締めくくられた。

戦後、各国の登山隊はヒマラヤ八千メートル峰を目指した。日本の山岳界においては、日本山岳会のマナスル登頂が戦後の先鞭をつけた行事であって、その意義は大きい。本部



記念講演は由緒ある建物で開催された

の小倉常任評議員の提案でこの講演会を開催できたことは大きな成果であった。

今回会場となった西日本工業倶楽部は昭和三十二年七月二日に横有恒元会長の出席のもと、北九州支部の発会式が行われた建物である。明治後期に松本健次郎氏が建てた和洋館併設の当時の代表的な邸宅で、往時のまま現存する唯一の建造物として重要文化財に指定されている。洋館はわが国近代建築界の先駆者であった辰野金吾博士の設計で、外観はビ

クチャレスクな建築様式を取り、ハーティンバ風の壁面とアールヌーボールの細部意匠にその特徴がある。一般公開はされていないが、今回は特別のほからいで使用させていただくことができた。

十八時からの晩餐会は、当支部にとっては現職の会長が初めて出席されるということで、これまでになく六十二名が参加した。小林義明永年会員の乾杯の挨拶に始まり、二時間に及ぶ会員相互の歓談ののち、長老岡本康夫会員の万歳三唱によって幕を閉じた。

(吉村健児)

岐阜支部

石井恵美子さんを偲ぶ

小津権現山・追悼登山

昨年十一月に、エベレスト山系ゴークン峰(五三八〇メートル)近くの山小屋で雪崩に会い、遭難死した日本山岳会会員石井恵美子さんを偲んで、四月十四日、岐阜支部会員、及びかねて所属していた科学研究委員会会員の有志ら六十六名が集い、ご遺族を招いて、岐阜県揖斐郡久瀬村の小津権現山(二一五七メートル)へ追悼登山を行った。

当日は、寒波も東へ去り、大陸の移動性高気圧が本州をおおい、穏や



穏やかな春日和に恵まれて六十余人が参加した追悼登山

かな春日和に恵まれ、里では梅の花が満開だった。

午前八時に登山口から、当日参加の会員も交えて出発した。

麓の樹木の芽はまだ固い。ウグイスやヤマガラのをさえずりを聞き、シヨウジョウバカマのピンクの花を見ながら登った。中間点の高屋山からは残雪を踏み締めて、急なところではザイルをフィックスするなどして、頂上へ十一時三十分全員がたどり着

いた。

頂上では、遺影の両サイドに花を供え、日本山岳会の会旗を飾って祭壇を設け、全員で黙禱したあと、高木奇男実行委員長が「江戸村（東京都）からご遺族、そして科学研究委員会から二十三名もの会員がかけつけてくださり、こうして恵美子さんを偲ぶことができ、本当にありがとうございます。故人もさぞ喜んでいらっしゃるでしょう」と挨拶。科学研究委員会を代表して森武昭会員からも挨拶をいただいた。そして、ご遺族の石井勝様が「岐阜は美しい自然があり、山仲間がいて、このように追悼登山をしていただき、姉も喜んでいらはす」とお礼の挨拶をされた。続いて全員で「坊がつる讃歌」を合唱し、最後に早田道治会員の音頭で、故人のご冥福を祈って「ヤッホー」を三唱し、式を終えた。

その後ビールを飲みながら昼食、故人との山旅の想い出を語り合った。

当日は、よい天気にも恵まれ汗ばむほどの陽気で、遠くに白山、荒島岳、北アルプス・中央アルプスの峰々まで眺望できた。

十三時下山にかかり、十五時登山口に帰着し、恵美子さんのトレッキング日誌の絶筆と図案をプリントした手ぬぐいを配付して、散会した。

（清水芳彦）

図書紹介



カット 中村あや

平井一正・著

『初登頂』

―花嫁の峰から天帝の峰へ―

著者は、巻頭の梅棹忠夫、藤平正夫両氏の言葉にあるように、第一級の登山家である。その著者自らが登頂者として、隊長として参加したチヨゴリザ、サルトロカンリ、シェルピカンリ、クーラカンリの四つの遠征記をまとめたものである。この四つの遠征が完遂されたのみならず、すべてが初登頂という栄誉をになっている。初遠征となったチヨゴリザの初登頂の感激、サルトロカンリの登山許可取得の奮闘努力、遠征回数を増すごとに、前回にかかった人たちの邂逅、山仲間の変わらぬ友情など、盛り沢山の内容が凝縮されている。そして初回一九五八年の船便と鉄道によるチヨゴリザ遠征から、飛行機とトラックによるクーラカンリの一九八六年の遠征まで、変化してゆく登山形態が、一読のもとに理

解される好著である。

(飯田 進)

一九九六年三月 ナカニシヤ出版
発行 三五八ページ 二千九百円

内田陽一・著

『知命からのヨーロッパ・アルプス―希望と祈り―』

中高年登山の盛んな昨今、著者も四十歳半ばにして登山に目覚めた一人。登山教室を中心に勉強・実技を積み重ね、ヨーロッパ・アルプスの旅へと出発した。本書はその紀行文である。

シャモニーを中心としたモンブランおよびその周辺の山々、ツェルマットを中心としたリスカム、モンテローザ、クラウンマッターホルンなど、多くの登山について述べている。ハイキングコースからキャンプ地、あるいはガイドとの契約など詳しく書かれており、この周辺に出かけてみたい人にはよき参考資料になるであろう。ハードカバーの立派な装丁であり、本文を読んでいて初めてのヨーロッパ・アルプスの感動が伝わってくるのだが、著者自身の登頂写真が随所に掲載されているのが気になる。

(林 栄二)

一九九五年二月 近代文藝社発行
二二五ページ 二千円

小倉 厚・著

『定年後は山歩きを愉しみなさい』

「山登りを始めたいのだが」こんな相談をもちかけられたら「いい本がありますよ」と勧められるのが本書である。今や中高年者の登山ブーム。遭難や事故など、いろいろ問題はあ

るが、この勢いはまだまだ続くだろう。本書は「専門的なガイドブックではありません。山歩きを愉しむためのものです」と言いながら、山歩きの基本をきっちり書いています。基本を知り、十分な知識と準備があつてこそ「楽しい山歩き」ができるというものだ。

本会会員である著者が、長年の経験に基づいて書いたものだけに、これから山歩きをしたいという人、初心者クラスの人たちにも好個の手引き書となる。

(伊藤 敏)

一九九六年四月 明日香出版社発行
行 二五三ページ 千三百円

宮原颯・著

『還暦のエベレスト』

戦中戦後派(一九三四年―昭和九年生まれ)の著者は「山へのかかわりが私の人生であった。そして、行き着くところにエベレストがあつた」

と言ひ、六十歳で今更と思い、登れる限界が……と若き日の「山や」の夢とあこがれの集大成を目指し、綿密な訓練と準備を重ね「宮原・貫田エベレスト・エクスペディション」を編成。隊員二名、サード一名、シェルパ十四名、BCマネージャー一名(女性)、コック三名の構成で、一九九四年ポストモンスーン期の八月二十七日にBC設営。十月九日、サウスコル―第四Cより八名が頂上に向かい、南峰(八七九三メートル)で著者は高度と体力消耗のためか? 右目の視力が極度に低下し、登頂を断念。貫田氏とシェルパ三名が登頂、翌十一日にサウスコルから全員無事に下山している。

本文は七章で「はじめに」で私の山とエベレストへのかかわり。第一章、エベレストの頂上を目指す登頂のハイライトと三〇〇メートルを残して無念の撤退を。第二章、遥かなるヒマラヤー夢のまた夢のエベレストでは、第四次南極隊に参加後に一九六二年日大隊のムクト・ヒマール遠征を経てネパール国に二年間就職。観光立国を旨に一九六八年ホテル・エベレスト・ビューとシャンボチエ飛行場建設許可を得た。ネパール政府は「これはアドベンチャーです」と補助金二千万円を拠出。必要資金は、友人、山関係者約二百名の

出資を仰ぎ、困難な建設を完遂するが、さらに難しい運営・維持管理に一時頓挫したこと。第三章から七章までは登山準備と実際のエベレスト登山を記し、「あとがき」で人はなぜ山に登るのであるのか、と問い、経緯と心の推移などを書かせてもらった、と記している。(三沢 一三) 一九九五年十一月初版 山と溪谷社発行 二三五ページ 千五百円

辻 齊・著

『魅せられてネパール』

『魅惑のヒマラヤ』

著者がテリツォ遠征のためネパールを初めて訪れたのは一九七九年三月のこと。首都カトマンズの街は、裸足で歩く人や色とりどりのサリーをまとった婦人たちであふれ、道路の真ん中には悠々と牛が寝そべり、それを縫ってやたらと警笛を鳴らしながら抜きつ抜かれつ車が走る。それらがごっちゃになって織りなす騒音に満ちあふれていて、少なからずカルチャーショックを受ける。そして、砂利敷の空港にゴトゴトと降り立って見たボカラの牧歌的な街。そこからテリツォへの遠征、魅惑のヒマラヤへの旅の始まりである。『魅せられてネパール』ではテリツォをはじめアイランドピーク(実際

はボカルデに変更された)、パルチヤモと三つの遠征を中心に語られ、『魅惑のヒマラヤ』は主にヒマラヤ山麓の村々を訪ねての道中記となっている。

著者のネパールへのほのぼのとした思いが綴られており、ネパールを知る絶好の書。二冊続けて読まれることをお勧めします。(飯田 進)

『魅せられてネパール』一九九五年自費出版 一九七ページ 千八百円

『魅惑のヒマラヤ』一九九六年三月 楓工房発行 三三〇ページ 二千円

岡崎秀紀・編著

『サイハン モンゴル』

『自然・人・生活』

『島根とモンゴルの交流史』

編著者の岡崎秀紀氏は、一九九二年から二年間にわたり、島根高校教員隊・島根県山岳連盟隊の隊長として、モンゴル・アルタイ山脈のバリラガチン峰・ツアスト山に登頂した。そして三年の登山準備期間と二年の登山活動の間、モンゴル国の自然と人々と生活を調査、観察した。

題名の「サイハン モンゴル」はモンゴル語で素晴らしいモンゴルの意。帰国後「サイハン モンゴル」の思いを県民に紹介する活動を行い、

その一環として「島根モンゴル交流のつどい」を企画。

春日行雄日本モンゴル協会理事長の講演「島根とモンゴルの縁結び」を聴き、島根とモンゴル交流の歴史の深さに驚くとともに、大きな感動を受けた。講演だけではもったいないという気持ちだが、この本の刊行にまで発展した。

本書は第一部でモンゴル国の紹介と、モンゴル旅行・登山ガイドとして役立つ情報を記す。第二部は、島根とモンゴルの交流史を、活躍した人々の紹介も含めて書いている。とくに春日行雄氏に関する記述には、日本人がどのようにモンゴルの歴史にかかわったか、一般の歴史書にはない驚きがある。第三部は、これからのモンゴルとの交流について、地域間交流だけではなく「環日本海」時代の国際交流について記している。 一九九四年 (株)報光社発行 千二百円

『モンゴル・アルタイ山脈ムンフハイルハン山群バリラガチン峰は微笑む』(一九九二)

『草洋に浮かぶ白い女神』(一九九三)

前記『サイハン モンゴル』の編著者・岡崎秀紀氏が隊長で参加した島根高校教員隊・島根県山岳連盟隊

の報告書である。この隊は一九九二年新生モンゴル国となって初の、またモンゴルアルタイクラブを窓口とする第一号の登山隊である。遠征目標に、モンゴル登山関係者との友好交流・モンゴル国の人と生活の理解を深めると記しているように、登山の記録だけでなく、モンゴル側登山隊員との交流、モンゴル語登山用語集、動植物に関すること、河川の水質調査、モンゴルの教育制度等々、記述は多岐にわたっている。

モンゴルの山を目指す人には貴重な資料となろう。(茂見 猛)

一九九三年、一九九四年 登山隊事務局発行 各千円

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

前田製管株式会社

本社/酒田市上本町6-7

☎ (0234) 23-5111

書籍受入報告 (1996年4月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
澤田啓 (編)	クロカン・マップ (第1集)	158pp/22cm	白山書房	1996	出版社寄贈
松田敏男	彩画山影: 松田敏男 山の画集	103pp/31cm	ふたば書房	1993	著者寄贈
黒澤きみ子	安曇野: 黒澤きみ子写真集	47pp/20cm	光村原版印刷所	1989	宮澤美渚子氏寄贈
峡彩ランタン会 (編)	ラテルネ (LATERNE) 第3集: 1992.10-1994.3	538pp/26cm	峡彩ランタン会	1996	発行者寄贈
岩橋崇至	名水・黒部の流れ: 岩橋崇至写真集 (BeeBooks No.47)	59pp/18cm	光村印刷	1996	著者寄贈
辻 齊	魅せられてネパール	197pp/19cm	辻 齊 (私家版)	1994	著者寄贈
JAC科学委員会 (編)	マッキンリー気象観測 1990-1995	31pp/26cm	JAC科学委員会	1995	発行者寄贈
小倉厚	定年後は山歩きを愉しみなさい	252pp/19cm	明日香出版社	1996	著者寄贈
穂苅貞雄	安曇野 (写真集): アルプス山麓の四季	72pp/19×25cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
中沢正夫	心やさしきネパール: 精神科医も癒されたトレッキング紀行	237pp/20cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
栃木県高体連登山部 (編)	輝ける白き峰: ニンチンカンサ西稜初登頂の記録 (栃木県高体連登山部中国チベット学術登山隊1995報告書)	138pp/26cm	栃木県高体連	1996	発行者寄贈
Yoshikawa, Kenji (ed.)	Scientific Results from the Antarctic Walk Environmental Research Expedition 1991-1993 (A.E.R.E.: Antarctic Environmental Research Expedition)	258pp/27cm	A.E.R.E.	1996	発行者寄贈
本島護 (編)	山のワザ: 未公開登山技術のすべて	73pp/22cm	長野県山岳協会企画広報部	1996	編者寄贈
沼田真	自然保護という思想 (岩波新書No.327)	212pp/18cm	岩波書店	1995	著者寄贈
福島正明 他	ヤマケイ登山学校 (1): 山を歩く	181pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
森田秀巳	ヤマケイ登山学校 (2): 山で泊まる	173pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
小池すみこ	ヤマケイ登山学校 (3): 山で食べる	165pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
今井やすひろ 他	ヤマケイ登山学校 (4): 山で着る・使う	196pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
酒井國光	ヤマケイ登山学校 (7): 春山	190pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
野村仁	ヤマケイ登山学校 (8): 夏山	180pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
福島功夫	ヤマケイ登山学校 (9): 秋山	165pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
若林岩雄	ヤマケイ登山学校 (11): 沢登り	186pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
丸山晴弘	ヤマケイ登山学校 (12): 中高年の山歩き	192pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
佐古清隆	ヤマケイ登山学校 (13): 単独登山	167pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
城所邦夫	ヤマケイ登山学校 (14): 山の気象学	202pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
北田敏一	ヤマケイ登山学校 (16): 山のトラブル対処法	239pp/21cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
北山真	ヤマケイ登山学校 (17): フリークライミング	157pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
今西錦司	今西錦司全集 [増補版] 第11巻: 自然と進化・人類の周辺	593pp/20cm	講談社	1993	購入
今西錦司	今西錦司全集 [増補版] 第12巻: ダーウィン論・主体性の進化論	432pp/20cm	講談社	1993	購入
今西錦司	今西錦司全集 [増補版] 第13巻: 自然学の提唱・自然学の展開	662pp/20cm	講談社	1993	購入
今西錦司	今西錦司全集 [増補版] 別巻: 年譜・主要著作目録・登山山名リスト	358pp/20cm	講談社	1994	購入
安藤正義 他	一等三角点の名山と秘境: 日本全国一等三角点配置図・総覧	339pp/22cm	新ハイキング社	1996	出版社寄贈
木下是雄	木下是雄集 (第2巻): 山ひとスキー	355pp/20cm	晶文社	1996	出版社寄贈
宮原巍	還暦のエベレスト	235pp/20	山と溪谷社	1995	著者寄贈
A.ファンショウ 他	ヒマラヤ・アルパイン・スタイル: 最も魅力的なルートからの高峰登山	192pp/29cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈

平成八年四月二十六日で現契約の期日となるので契約更新について討議。指導部より存続希望があり、内容についても引き続き検討する。

(九) 山岳傷害保険の件

継続審議
中川

三月三十日締切で加入申込者は四百四名。四月以降は各月末締め切り、期間は三月年度末までとし、保険料は月毎の計算となる。会報「山」にも広報する。

(十) 図書室の整理の件

承認
中川

現在、総務・図書・資料の三委員会協賛中であるが、①処分するものに対して(価値判断)の一任 ②資料の一部を一〇四号室にキャビネットを設置して移す ③その一部スペースに余裕が見込めるので、使用を希望する委員会は担当理事を通じて申し出られたい。

(出) 委員会委員追加承認の件

承認

自然保護委員会・大蔵
自然保護委員 金井一子(会員番号一四三〇) 承認

【報告事項】

●K2登山隊一九九六 宇田川
山本篤隊長より登山募金の状況など現況説明があった。

次代に残そう美しい山と溪

●自然保護委員会

大蔵

①鳥海山イヌワシ生息状況については四月末を目途に、山形県文化環境部保護課に本委員会名で中間報告を提出する。最終報告書は平成九年三月四月にまとめる予定。

②平成八年度自然保護全国集会は九月七日(土)〜八日(日)長野県小谷温泉で信濃支部の協力を得て行う。

●マカルー登山隊報告書

大倉

登頂報告書は、(株)山と溪谷社より「マカルー東稜初登頂」三月入稿、六月出版の運びとなった。

●山岳研究所運営委員会

溝口

山研利用規定の一部修正して、郵便振込み口座を設けた。

口座名称 日本山岳会・上高地山研
口座番号 〇〇一四〇一七五八二
一三九

詳細は「山」四月号に掲載する。

●遭難対策委員会

熊崎

①日本山岳レスキュー協議会では、本年のゴールデンウィークの登山情報を収集しているが、JACCにおいても各理事を通じてのネットワークへ参加の輪を広げてほしい。

②プラスチックブーツ懇談会では、実態調査とポスターアピール等の活

動を行ってきたが、その経過報告と今後の意見交換の場として、四月二十一日(日)九時十七時、国立スポーツセンターでシンポジウムを開催する。多数の参加を望む。

●指導委員会

熊崎

①三月二十三〜二十五日、菅平・根子岳において初中級者対象山岳スキー研修会を開催。スタッフ五名、研修生二十一名参加、大好評であった。

②四月十三日(土)〜十五日(日)、谷川岳周辺において中上級者対象山岳スキー研修会を開催する。冬山総合技術の習得を目的とし、スタッフ五名、研修生七名が参加予定。

③五月三日(金)〜六日(月)には指導委員会委員のみを対象として研修合宿を剣岳周辺で行う予定。文部省登山研修所やフランス国立スキー学校レベルの技術の研修を予定している。

④この三月は大学山岳部関係の春山合宿における死亡事故が頻発した。指導委員会として八年度計画の中でもとくに青年部・学生部と連携し、大学山岳部のリーダー部員・OB指導者に対する技術研修を充実させていきたいと考えている。

●海外連絡委員会

熊崎

カナダ山岳会とのアルバータ山初登頂記念イベント(五年後)について、海外委員会では今夏、担当理事が現地調査と状況把握をかねて、カ

ナダ山岳会主催のキャンププログラムに参加することにした。

●ポカラ山岳博物館

大屋

ネパール山岳協会会長の来訪に際し、平成八年五月着工し、九年秋の完成予定で協力の要請があった。大森常任評議員も現地で直接、博物館の壁面を飾るヒマラヤ八千メートル峰十四座の写真パネルの寄贈を要請された。本会としては現地の進行状況にあわせて対応していくことを協議。

●財務委員会

吉永

現在一〇四号室の賃貸に関し、継続の方向でオーナーと協議中である。

●科学委員会

松浦

①科学委員会委員長は、森武昭会員

味の技、心でつくる



むさし 坊 H比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有明1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし 坊 麹町店
(有明線麹町駅)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし 坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆづん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし 坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

から北野忠彦会員(会員番号一〇四一四)へ交替。

②探索山行は「古代陸封植物の探索」のテーマで六月八日(土)〜九日(日)、菅平周辺で行う。「山」四月号に掲載。

③講演会「南極観測と地球環境」を七月三日(木)、本会ルームで開催する。詳細は「山」五月号に掲載。

●総務委員会

中川

①入会のしおり発刊。入用の方は総務委員会まで。総会通知書に一部同封し、全会員に送付する。

②一〇四号室にキャビネットを設置。スペースの必要な委員会は検討。

③五月十八日、十時支部長会議。九十周年記念事業委員会及び関連委員会の解散式。十四時通常総会。於水道橋グリーンホテル。

●集委員会

中川

①サクラハイイク 四月十四日(日)、九五年入会者を中心に奥多摩・陣馬山山頂で餅つき、六十名参加予定。

②調査山行(若葉会山行のため) 五月十一日(土)〜十二日(日)。

③若葉会山行 五月二十五日(土)〜二十六日(日)、新潟県入広瀬村をベースに二十五日越後金城山、二十六日浅草岳、二十回記念誌発刊、記念イベント。

④講演会 七月上旬、協力・東海支部、講師・梶田民雄氏、テーマ「カジタのピッケル・アイゼン」。

INFORMATION



◆「中華民国山岳協会登山隊」来日

海外連絡委員会

蔡禮樂氏を隊長とする総勢四十名の岳友たちが、当会との親善交流をかねて、槍・穂高登山を目指して来日します。同隊の行動予定は左記のとおりです。

七月十日 十六時羽田着

歓迎会・十九時 於松本楼

(東京都千代田区日比谷公園一―二

TEL・〇三―三五〇三―一四五二)

七月十一〜十四日 槍・穂高岳登山

七月十六日 離日

*お問い合わせは海外委・木村俊博

藤田礼子まで。

◆一九九六年自然保護全国集会

自然保護委員会

日時 九月七日(土)〜八日(日)

場所 長野県小谷温泉「山田旅館」

内容 ①オリンピック及び国営アル

プスあづみの公園現況視察

②支部報告

③雨飾山登山

費用 全国集会参加費・一万二千元

*六日夜、新宿発のマイクロバスで

(バス代一万五千元) 雨飾山登山

口へ直行します。下山後全国集会

に参加の予定です。

申込 近藤緑まで(一六六七 杉並

区西荻北二一〇―二二一五

〇二)

*詳細は次号でお知らせします。

◆秋の栗駒山へ集合!!

ジャック93会

日時 九月二十八日(土)〜二十九日(日)

宿泊 いこいの村栗駒(一九八九―

五三 宮城県栗原郡栗駒町沼

倉 TEL・〇二二八―四六―二

〇二)

費用 一万円(宿泊費及び懇親会費)

交通費は各自負担

申込 大場悠平まで(二二四八 鎌

倉市常盤一―二〇六 TEL・〇

四六七―四六―五〇二)

*詳細は八月号でお知らせします。

◆全国支部懇談会のお知らせ

東海支部

日時 十月五日(土)〜六日(日)

場所 奥三河(愛知県南設楽郡鳳来

町・北設楽郡東栄町)

定員 百五十名(フォーラムのみの

参加者を除く)

会費 一万円(宿泊・懇親会・二次

会・昼食代を含む)

前納をお願いします。(郵便

振替 蒲郡駅前郵便局 口座

番号・〇〇八五〇―一六四

七四二 口座名・長坂博)

集合 十月五日十三時三十分〜十四

時三十分(受付)

「山びこの丘」(二四四一―一

九 愛知県南設楽郡鳳来町玖

老勢字新井九(JR飯田線本

長篠駅下車、バスあり)

TEL・〇五三六三―五―一九一

●十月五日(出)

①フォーラム「中高年登山の諸問題」

(山びこの丘・武道館)

十三時三十分・受付

十四時・開会式

十四時三十分〜十七時・パネ

ルディスカッション

②クライミング(フツポウウオール

人工登攀壁)・定員二十名

十三時三十分・受付

十四時三十分〜十七時

③懇親会(大食堂・中食堂)

十八時〜十九時三十分

④ファイヤーストーム(二次会(下段

駐車場バーベキューハウス)

二十時〜二十一時

⑤宿泊(宿泊棟・バンガロー)

●十月六日(日)

①朝食(大食堂・中食堂) 七時〜

②明神山登山・健脚向き

(山びこの丘→三ツ瀬→明神山

山研休館日のお知らせ

山研では管理人休養のため、休館日を下記のように定めました。山研を利用される会員は休館日をお過ごしください。

●5月	15日(水)	16日(木)
●6月	12日(水)	13日(木)
●7月	17日(水)	18日(木)
●8月	休館日なし	
●9月	11日(水)	12日(木)
●10月	16日(水)	17日(木)

◆「山岳」バックナンバー特別割引
頒布 図書管理委員会

「山岳」及び「山岳総索引」の在庫

申込 申込用紙に記入し、郵送で長坂博まで(〒四四三 愛知県蒲郡市宝町六一四 TEL・〇五三三・六八一・二〇八八)

⑤解散式(山びこの丘 会議室)
八時三十分～十四時三十分

④鳳来の岩場(山びこの丘→鳳来の岩場(天然の岩場)→山びこの丘)
八時三十分～十四時三十分

③鳳来寺山登山・一般向き
(山びこの丘→門谷→奥の院→鷹打ち場→東照宮→門谷→山びこの丘)

↓三ツ瀬→山びこの丘
七時三十分～十四時三十分

整理のため、左記のバックナンバーを特別割引価格で頒布します。

申込 ハガキかFAXで図書管理委員会へ。八月末まで受け付けます。

価格 「山岳」各号・千円

「山岳総索引」五百円

*いづれも送料込み価格です。書籍到着後、振込用紙で送金ください。

●「山岳」年次(刊行年)

第六四年(一九六九年)

第六五年(一九七〇)

第六八年(一九七三)

第七一七二年(一九七六～七七)

第七三年(一九七八)

第七四年(一九七九)

第七六年(一九八一)

第七九年(一九八四)

第八〇年(一九八五)

第八一年(一九八六)

第八五年(一九九〇)

第八六年(一九九二)

第八七年(一九九二)

●「山岳総索引」

第二六年一号～六〇年まで 一九

七一年発行

■会員異動

物故

末松大助(三一一八) 8・4・11

退会

横田茂雄(七三三六) 8・3・31

山内勝美(七一六五) 8・4・30

ルーム日誌

4月

1日 総務委員会

2日 指導委員会 アルパインスケッチクラブ 山の自然学

3日 青年部

4日 集委員会 アルパインスキークラブ

5日 フォトビデオクラブ

6日 自然保護委員会

8日 アルパインスキークラブ

9日 二火会 アルパインスケッチクラブ

10日 常務理事会 会計監査 ジャック93会

11日 理事会 集委員会

15日 総務委員会

16日 山研委員会 図書委員会

17日 三水会 山の自然学

18日 評議員会 集委員会 緑爽会 遭難対策委員会

19日 青年部

20日 マナスル打ち合わせ会

22日 資料委員会 指導委員会

23日 自然保護委員会 フィールドビ

25日 デオ委員会

26日 科学委員会 集委員会

青年部

4月来室者699名

◆編集後記◆

平成八年度通常総会も無事終了しました。私たち編集委員会が会報編集業務に携わるようになったのは、平成五年度通常総会からで、まる三年経ちました。

この間、三十六回編集・発行したわけですが、最初の頃の紙面と最近のものを見比べてみますと、だいぶ変わってきています。毎号毎号ではあまり気がつきませんが、少しずつ変わってきているのです。これがいよいよ方向が否かは皆様がたのご批判に待ちます。

「読みやすくなった」との声も聞きます。また、「訂正」が少なくなっただことも確かだと思えます。

あと一年、よりよい会報を目指して、頑張りますので、よろしくご支援のほどをお願いいたします。

(編集委員会一同)

日本山岳会会報 山 613号

1996年(平成8年)6月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行人 村木潤次郎

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 双陽社